

インタープレス

科学技術熟語表現

大辞典

〈和英〉

インタープレス
科学技術熟語表現
大辞典
〈和英〉

『科学技術熟語表現大辞典』刊行に当たって

1974年4月に月刊誌『工業英語』を創刊して10年の日月が経過いたしました。この間、きわめて読者層を限定した月刊誌である『工業英語』、いったいなにほどのことができたのでしょうか。工業技術関係の英語を工業英語という言葉で一般化したことには貢献したことでありましょう。それに伴い、工業英語には独特の語法があること、すなわち、技術を理解する力がなくては存分に活用できない語彙、語法、形式があることを知らしめることにも力あったものと信じます。さらに、翻訳に技術あることも、『工業英語』誌がもっとも執拗に主張し、及ばずながらそれを立証しようと努め、工業英語翻訳に権威を付与することにも、いざばかりか功あったと認められましょうが、

さらに多くのこと、語彙、語法、統語論を深め、さらに体系的に工業英語論を展開すること、百科事典、類語辞典、数カ国語辞典、反対語辞典、あるいは和英対応のソーラスの編纂など、大小規模の特殊辞典の出版をと、わたしたちはこの10年間にさまざまな計画を持って日々に対処してきましたが、しかし、これらはいまコンピュータ技術の力を借り、ようやく緒についたばかり、その成果を世に問うのは今後の10年へと持越され、今、ここに出版する『熟語表現』を含む科学技術三大辞典に、これまでの10年間の思いを凝縮させることになりました。

わたしたちは、1983年4月に刊行した『科学技術25万語大辞典』で語彙を集成し、言葉の典拠すなわち語義なりとの新しい辞典作りを試みました。ついで1983年11月に刊行した『科学技術活用大辞典』では、世界にない対訳コンコーダンスを開発、語法解明の基礎となる仕事を手掛けました。これら全ては、コンピュータによる処理を前提とした編集計画から始まり、数々の電子辞典（単語レベル、文章レベル）を構築し、編集プログラムを開発することで成しとげました。コンピュータなくしては物理的に不可能な処理を実行することで、これまでにない、しかし必ずあって然るべきである辞典作りを行ってきたわけです。

そして今回、翻訳技術にとくに着目した大辞典である本『科学技術熟語表現大辞典』を編纂して、『工業英語』誌創刊10周年記念事業科学技術三大辞典の掉尾を飾るべく、ここにその成果を問うに到りました。コンピュータに蓄えた対訳文例群、そしてもうひとつ熟語成句の英和対訳語句群、この二つの語群を自動処理した編集作業は、かつて経験したことのない、全く新しい試みではありましたが、数次にわたる中間チェックを重ね、ついに目的通りの結果を得ることができました。わたしたちの喜びが、利用者各位の喜びともなることを祈るのみであります。

1984年4月

藤 岡 啓 介

追記：本大辞典の熟語成句の選定に当たりましては、先に小社が刊行した『成句活用辞典』（1978年4月）『翻訳発想辞典』（1977年11月）に多くを負っております。前書では監修に当たり、後書では対訳、注解の執筆に当たられた工業英語翻訳家水上龍郎氏に、末尾ながら深甚なる謝意を表します。なお、対訳データ作成に当たり、両書の訳文を編集部にて大幅に改訂いたしておりますが、これらの責は一切編集部にあることをここに明記いたします。

● I P電子辞典覚え書

科学技術の用語を英和対応の形でコンピュータに入力し、必要なソフトウェアを開発して思うがままの辞書を編集したらどうであろうか、また、それが果たして可能であろうか――。

印刷技術のひとつである写真植字機が、コンピュータにより入出力される電算写植機となって間もない時、かねてからの辞書自動編集の願いがいよいよ現実のものとなった、なつたはずだと、早速に試みたのが1975年、秋に原稿を調べて印刷所に渡し、翌76年の4月に刊行した『英和科学技術複合語辞典』（小柳修爾著）で、これが今日いうところの“電子辞典”を目論んで当社が取組んだ最初のデータ作りでありました。

しかし、意図は善しとしながら、結果は従来技術で作るものとならな変わりのないものとなってしまいました。校正機能のない端末機、未熟なプログラム、そして辞書編集者側の非現実的なデータベースの設計思想などが原因でした。折角用語を英和対応で入力し電子化（紙のさん孔テープ）しながら、和英編を自動編集することは勿論のこと、英和編においても最終プロセスでは手作業に頼るという、“電算”に適わしくない貼り込みで終幕を迎えることになったのです。

1984年4月現在、当インタープレスでは語彙総数40万語を越える科学技術用語（英和対応）、ほぼ4万件にのらうとする対訳文章をコンピュータ処理可能なデータベースとして貯え、編集処理プログラムを開発してきております。またこの間、小辞典シリーズから1983年4月刊行の『科学技術25万語大辞典』、同年11月刊行の『科学技術活用大辞典』など、すべて電算処理による大辞典を作成し、さらに入力データの一部を『I P電子辞典』として商品化することに成功しました。

このたび『科学技術熟語表現大辞典』を刊行するに当たり、また『工業英語』誌上に新しいデータベースを継続的に公開するに当たり、当社における辞書の“電子化”の経緯を記してニューメディア時代に脚光を浴びるデータベース作りの舞台裏をご紹介します。

「複合語」では発注する側の不勉強、受注する側での支援体制の不備があつて当初の目論見であつたデータベース作成はデータがありながらデータとして使えないという結末になってしまいましたが、つぎに試みた「語群」では、英和データを和英に自動的に編集させることに成功しました。

工業英語を名詞でみる場合、複数語によってひとつの技術語が成立していることに気がつきます。たとえば straw bag wearing machine（かます織機）、cattle-clipping machine（家畜剪毛機）、crimping beading-and-flanging machine（型押し縫合機）、cylindrical grinding machine（円筒研削盤）など、名詞、形容詞、現在分詞などが machine という名詞に連なつて1語となります。試みに、この machine があとにつく言葉を集めてみたらどうなるだろうか。『工業英語』誌の1977年4月号から連載した「語群研究・machine」の英和編、和英編は、こうした意図で1976年に着手したものであります。

「複合語」のときよりも発注する側も研究が進み、英語に対応する日本語を machine readable とさせるために読み仮名を付けるなど、事前の作業も施して美事2,100余件の英和を和英に自動的に編集し直すことができました。

しかし、ここで問題となつたのはコストの問題です。事前の仮名ふり作業と紙テープを相手の校正処理の煩わしさと不確実さも好ましくありませんでした。

書籍の索引を作る程度の規模ではコスト高でプログラム費を支払い電算写植機まで動かす意味がありません。コンピュータ処理ならではの（単に語順配列だけでない）プログラムを開発して初めて、自動処理のメリットが現われてくるものです。当然の事実ながら、その事実の重みを請求書を前に改めて噛みしめたものであります。

『語群』を誌上に発表した1977年、きわめて単純な構想ではありますが、語彙の継続的増殖と1語1語に典拠（専門技術分野）を与えることでコンピュータならではの技術的効果、経済効果が得られることに思い到りました。それは、machine, test, deviceなどの技術語の語群ではなく、技術の専門分野ごとに使用されている言葉を語群としてとらえるものであります。

1978年春、新しい構想のもとで技術分野別に語群の入力を開始しました。翌79年3月から毎月刊行というハイスピードで『J I Sに基づく英和・和英技術用語辞典』シリーズ全5巻が刊行されました。そして引き続いて『学術用語に基づく英和・和英科学技術用語辞典』全5巻の刊行。

このとき、当社の入力する英和対応の用語集は、コンピュータ・システムによって利用しうるデータベースとなったのであります。

1. 言葉に典拠を付与（典拠は即語義である）。
2. 増殖が可能。典拠内での用語の増殖、典拠を新設し新語群を増殖。
3. 加除訂正（日々新版）。
4. 対応外国語の追加。
5. 対訳文章のデータ化。

以上のようなねらいを持たせた基本設計でデータの構築が開始されたのですが、当面は1. 2. 項が効果的に満足されればという状態でした。日本語（漢字）をディスプレイできる端末機がなく、入力も従来の日本語タイプライターに特殊なデバイスをつけて漢字コードを紙テープにさん孔するといった有様です。現在のワードプロセッサ、マイコンでの入出力、処理能力にはほど遠いもので、3. 4. 5. 項が容易にかなえられるときこそ、われわれがかって夢想もしなかった“電子辞典”のイメージを持つ辞書が現われることになるう、わたしたちは期待しました。

1983年4月、『科学技術25万語大辞典』が誕生しました。紙テープで構築してきたデータはいつか入力端末機のフロッピーディスクに移され、日々画面を見ながら入力し、訂正し、語群を増殖し、そして新しい画面を設計しながら対訳文章までも容易に入出力、処理できるようになりました。まさに電子辞典の出現であります。当社の『25万語』とそのデータベースを取材された1983年6月7日付の毎日新聞夕刊に「電子出版25万語…世界でも初めてという“電子辞典”が誕生した」と大きく報ぜられ、ついにわたしたちの jargon であった“電子辞典”なる言葉に市民権が与えられました。

いま“IP電子辞典”は英和対応用語、文章の従来データの拡充に加えて、複数外国語のデータ構築へと歩みを進めておりますが、ニューメディア時代、本データベースが紙をメディアにしない辞書としての場を得ることは勿論、情報検索システムに、自動翻訳システムにと、その用途を拓いていくことでしょう。

その中で、わたしたちが当面お約束できることは何かといえ、膨大なデータを処理して、重要語の頻度分析、基本語彙の選定、標準対訳文例の作成、新語情報の提供など、翻訳の現場に直接役立つ事柄を、紙のメディア（書物）、磁気メディアを利用して提供することであると考えております。ご期待いただくと共に、利用者各位からのご要望、助言、資料提供を心よりお待ちしております。

1984年4月

Editor 藤岡啓介記

追記：『工業英語』誌創刊10周年記念事業として科学技術三大辞典『25万語』『活用』『熟語表現』を企画、無事刊行するに至りましたが、当社のデータベース構築開始時より一貫して、その優れた技術力を発揮して支援して下さったアドレスデータ㈱に、誌面を借りて末尾ながら感謝いたします。とくに同社社長杉山光氏の適切な助言、未来を確信した励ましの言葉、納期・コストでの協力がなければ、このような事業は成立しなかったでしょう。また、企画・編集・製作・販売の全てで責務を分担してこの『三大辞典』に取り組んだ当社専務取締役藤岡美保子および幹部スタッフ川口一之、可部淳一の名を記して、本事業完遂の喜びを共にしたいと思います。

本書の成り立ち

——活用辞典，コンコーダンスの応用または発展として

本辞典は、別稿でも言及があるように、1983年4月刊行の『25万語』、同年11月刊行の『活用』と合わせて、小社の大辞典三部作を構成するものです。内容の点では『活用』と、ほぼ同じ構想に基づいており、活用辞典及びコンコーダンスの考え方を応用あるいは発展させる形で製作しております。

ここでは、本辞典の成立事情の一端を明らかにし、本辞典利用の便に資するため活用辞典とコンコーダンスについて簡単に触れてみます。

●活用辞典の必要性

言葉の意味が分からなければ、翻訳はできません。しかし、言葉の意味が分かっただけでは十分ではないでしょう。

単語1つ1つの意味は分かるし、英語のままで内容も掴めるのだが、どうも日本語にならない——英文和訳をしていてこう思ったことのある人は少なくないと思います。同じことは、和文英訳の場合にもあてはまることです。

どうしてこういうことが起きるのか？それは言葉の使い方、結びつき方、日英間の発想の違いを自在に変換する方法が分からないからではないだろうか。それなら、言葉とそれを使った例文とを組み合わせ、まとめたらどうだろう。言葉の持つ多様な意味が文中で示されるような例文を集めれば、翻訳はずっと能率的にすすめられるようになるのではないだろうか。

活用辞典の発想はこんなところから出て来たのでしょうか。

「英作文は英借文」という言葉は活用辞典の有効であることを明快に表わしていますが、この有効性を増すためには、当然そこに収められている例文の質が問題になってきます。借りるに値する質のよい例文を数多く集めることが、活用辞典の価値を高め、活用の度合いを増すための眼目となってくるわけです。そして、そのことが活用辞典を作る側にとっての大きな課題であるとも言えます。

●活用辞典へのアプローチ

見出語と、それを含む例文を示したものの、活用辞典の形式を要約すれば、こうなりますが、その作り方には2つの方法が考えられます。

1つは、見出語となるべき言葉を鍵にして、それを含む文を渉猟し、集めたものを整理してまとめるという方法。

この方法で作られたものは、例文の出所の多様性に富んでいます。小説や戯曲などの文芸作品、新聞記事、手紙等々——世の中に流布しているすべての“文”が（特に枠を設けない限り）対象になります。1つの言葉の持つ多様な意味をカバーするには効果的ですが、反面、一冊の辞典という統一体に多様性が同時に含まれることになり、技術文書の翻訳に必要な例文を小説から借りるとい

うような、翻訳者にとってはいささか不本意な事態も起こりえます。

この問題の解消のためには、当たり前のことですが、例えば技術文書翻訳のための活用辞典を作るときには、技術文書のみから例文を収集すればよいわけです。

現在、刊行されている多くの活用辞典は、そのほとんどがこのような方法で作られています。内容を充実させるためには、時間と労力をかけなければなりません。

もう1つは、情報処理の分野で“クイック” = KWIC (key word in context) と呼ばれる処理を行って作るもの。正確には KWIC インデックスと言うべきなのですが、『マグローヒル科学技術用語大辞典』には次のように説明されています。

「書物の題名やその書物の引用句などのキーワードを選定し、このキーワードが題名または引用文のどの部分にあっても、これが一定の位置にくるように配列した索引」

別の言い方をすれば、ある1つのまとまった文献をコンピュータに入力し、選定されたキーワードとそれを含む文 (= context) をすべて示したものの、ということになります。

この方法で作られたものが、コンコーダンスとして刊行されている例がありますが(後述)、理論的には入力した文献の中の言葉をすべてキーワード、あるいは辞書的な言い方をすれば見出語として取り出せます。しかも、元が1つの統一ある文献ですから、見出語を含む文のレベルも一定です。入力した文献がマニュアルなら、そこから取り出した文がすべてマニュアルに使われる文ということになるのは、当然のことであるわけです。

したがって、この方法で活用辞典を作れば、それはマニュアル翻訳のための例文集としては、最適のものであるといっても過言ではないでしょう。本『熟語表現』においては、ここで言う「統一ある文献」として、米国の技術雑誌 *Machine Design* の記事を採用しています。さらに、単語単位のキーワードに加えて、熟語成句をもキーワードとしているため、単語の用例と熟語成句の用例が検索可能です。

●コンコーダンスの価値

KWIC の応用としてのコンコーダンスには、上述のように活用辞典への展開もあるわけです。これについてはさらに後述しますが、その前にコンコーダンスの価値の高さ、あるいは存在意義について、実際の例に基づきながらも少し検討してみましょう。取り上げるのは、コーネル大学出版局刊行の『種の起源によるコンコーダンス』(*A Concordance to Darwin's Origin of Species*)です。

これは、コンピュータによって出力したリストをそのまま写真製版して本の形にまとめたもので、いかにも“データ”という印象の強いものです。頁の中央に大文字でキーワードが縦に並べられ、その左右には、キーワードが含まれている文が続いています。つまり、キーワードがどの文の中にあるかが分かるようになっていくわけです。各文には、『種の起源』(初版)の中の何頁にその文があるかを示す数字が付されています。

「進化に対する関心の高まりに応じて、このコンコーダンスを作った」と序文は始まっています。ダーウィンの数多い著作の中から『種の起源』を選んだのは、これがダーウィンの最良の著作であるばかりでなく、人類の文化に大きな衝撃を与えた書でもあるからだ、としています。

そして、ダーウィンのこの書は、刊行以来そこに盛り込まれた思想や使われている言葉に込められた様々なニュアンスによって、進化を研究する者の興味をかきたてたり、悩ませたりして来たが、このコンコーダンスを分析することで、ダーウィンの思想をより良く理解する一助としてほしいと述べています。

この序文の中で注目したいのは、このコンコーダンスが進化を研究する者だけに役立つのではな

いと言っている点です。歴史学者、生物学者、言語学者とつづいて一般大衆 (general public) にも役立つとしているのです。

一般大衆というのは、いささか勇み足の感もありますが、編者の言いたいのは、利用者側の取り組み方によって、いかようにも価値を引き出せる内容を持っているということでしょう。

一見すると、単なるデータの集積でしかないようでも、そこに潜んでいるものは大きいわけです。言語学者というのが出て来ましたが、その気になれば、翻訳者にも使えるものとなります。例えば動詞と前置詞の結び付きなどが一瞬瞭然に示されるわけですから (ただし、19世紀の英語だという条件付きですが)。

●コンコーダンスと活用辞典の間

KWIC を出版物に利用した例は、前述のダーウィン以外にも、シェークスピア全戯曲のコンコーダンス (*The Harvard Concordance to Shakespeare* by Marvin Spevack, 1973 Georg Olms Verlag, Hildesheim) などもあり、それ自体は決して珍らしいものではありません。

しかし、それらの用途は主として研究に向けられており、ダーウィンのコンコーダンスの序文に“一般大衆にも有益”とはあるものの、大衆的な用途とはいささか縁遠い感がありました。コンピュータ出力のリストをそのまま写真製版して本にしようというような素材むき出しの出版物が存在する余地があるのもそのあたりの事情を暗に語るものと言えそうです。

もっとも、これらは欧米の出版物であり、コンコーダンスの大衆的な用途と言っても、そもそもそれ自体が実態の乏しいものだからかもしれません (ここでは、コンコーダンスという言葉で KWIC を利用したものに限定して使っています。それ以外のコンコーダンスとしては、聖書やシェークスピア作品などかなり一般的なものがあります)。

ところが、日本では事情が異なります。ひとまとまりの英文にその対訳日本語を付け KWIC を行えば活用辞典が出来てしまうのです。もちろん、実際はこんなに簡単に行くものではありません。

どういう英文を使うか、その日本語訳は信頼のおけるものか。さらにはキーワード抽出の問題。英文に関しては単語ごとにキーワードとして扱えますが、日本文からどのようにキーワードを抽出するか。そして、これは英文のみの場合にも共通ですが、抽出したキーワードの選定の問題。それらが解決すると、ではどのような組体裁にすれば使い易い活用辞典となるかというレイアウトの問題等々。

コンコーダンスと活用辞典の間には、このように解決すべき問題が山積していますが、これらはどちらかというところ“ハード的”な問題です。KWIC を利用したコンコーダンスを活用辞典に仕立て上げるという発想——これは“ソフト的”な問題と言っていいでしょう——を、いったん確立してしまえば、技術的に対処できるものです。

コンコーダンスは、翻訳のための活用辞典への応用という、言わば極めて日本的な必要性から生じた発想によって大衆的な用途を確立しえた、と言うことができるでしょう。

(本稿は『科学技術活用大辞典』掲載の「本書の成り立ち——コンコーダンスと活用辞典」に加筆したものです)

凡 例

〈本辞典の構成〉

- ・本辞典は熟語表現キーワード（英和・和英）と辞典本文との二部構成になっています。
- ・英和キーワードは本辞典の和英編に、和英キーワードは本辞典の英和編にそれぞれ収録されています。
- ・本凡例は辞典本文を対象にするものです。キーワードの凡例は、キーワード扉にあります。

〈見出語〉

- ・見出語には、以下に示すように単語見出しと熟語見出しの2種類があります。

〔単語見出しの例〕

英和編——abandon, abbreviation, ability…………

和英編——相変らず, 合図, 間…………

〔熟語見出しの例〕

英和編——[this is] accomplished by (で) 実現できる, according to (に) 従って, (に) よれば…………

和英編——(の) 間 (時間, 距離) for the space of, (～) と相まって～した combined with…………

- ・単語見出しは、英和編では英語のみ、和英編では日本語のみとなっていますが、熟語見出しの場合は英和編・和英編ともに英語・日本語を併記しています。

- ・原則として見出語には、それを含む例文を付していますが、熟語見出しのものには、一部例文のないものもあります。

- ・見出語は、例文中の位置に関係なく（つまりその語が文頭にあって大文字で始まっているような場合であっても）すべて小文字で示されています。

〈例文〉

- ・本辞典の例文は、米国ペントン社刊行の技術誌 *Machine Design* に1975年から1977年にかけて掲載された記事から選択されています。訳文作成にあたっては、前後関係から英例文中にない言葉を補っている場合があります。

- ・例文中の太字部分は、英和編の単語見出し例文では見出しに対応する英例文中の語、和英編の単語見出し例文では見出しに対応する和例文中の語です。

- ・熟語見出し例文においては、英和・和英編ともに英例文・和例文中の見出し対応部分が太字になっていますが、和例文中では、文脈に応じて見出しとした訳語を適宜変更しているため、見出しとした熟語の和訳と例文中の当該熟語の和訳とは必ずしも一致しません。和例文中に太字のないものは見出し熟語に相当する意味が言外にあり、文中に表れていないものです。

- ・1つの例文中に見出語と対応する部分が複数個所あるときは、同一例文が複数回示され、文中の太字部分が順に移動して行きます。

〈削除語について〉

本辞典では、熟語以外の見出語を例文中から抽出しています（前稿『科学技術熟語表現大辞典』

の成り立ち」参照)。英和編では英文を構成している単語をキーワードとして扱い、これを含む文を検索するという形で、和英編では和文に原則として品詞単位による分かち書きを施し、その分かち書きの単位ごとにこれを含む文を検索するという形で、それぞれの基本データを作成しました。

この基本データには、“the”, “a”, “an”, “and”, “of” あるいは、助詞の“が”, “は”, “に”, “を”などのように非常に高頻度で文中に出現するものが多数含まれていますが、これらをそのまま収録することは、使いやすさの点で支障をきたす原因になるとの判断から、あらかじめいくつかの語を削除語に指定し、基本データから、排除するという方法を取りました。

削除語の選定に当たっては『種の起源によるコンコーダンス』の削除語リストを参考にし、別表に示すような結果を得ました。最終データをまとめるに当たっては、さらに削除を加え、最終レコード件数は英和編18,295件、和英編18,355件となりました（ここで言うレコード件数とは、見出し1つと例文1つとの組み合わせの数です。したがって、ある見出しを含む例文が2つあるときのレコード件数は2件ということになります）。

削除したレコードの中には、貴重なものながら、やむなく削除対象としたものも多数ありました。これらについては、整理の上、小社刊行の月刊誌『工業英語』誌上で順次掲載して行きます。

削除語リスト

ここに示すのは、第1次選定の削除語リストです。数字は出現回数を示します。

▶英 語	his.....19	you.....17	ても..... 6
A73	hundred 1	Your..... 6	と.....1205
a.....815	I..... 5	yourself 1	とも.....18
All12	I'm 2	合計10244	な398
all62	Inc 2		ない100
Also11	is.....552	▶日本語	ないし.....21
also55	It35	あって.....14	なく.....41
An 9	it103	あの..... 4	なけれ.....37
an.....187	Its 1	あり.....53	など.....76
And.....19	its55	ある.....605	何..... 8
and946	me..... 2	あろう.....40	なのだ..... 2
Another11	my 1	いた.....14	ならない.....47
another..... 9	Of 7	いる576	ならびに.....29
are.....327	of.....1494	か167	に.....2370
At17	or223	が.....1375	にくく..... 1
at174	Our 1	かも..... 9	の.....3187
be328	our 8	かれら..... 1	は.....1553
been77	own..... 6	彼ら..... 4	ば.....66
being43	P 2	こと408	へ.....47
But.....41	percent 3	この319	また.....92
but42	pound 2	これ.....69	または.....34
C.....12	psi.....10	これら.....62	まで.....74
Co 8	The.....296	さ 1	も233
cu..... 6	the2091	され..... 4	もつとも.....20
do22	Their..... 3	された..... 4	もの.....193
does.....22	their50	し.....24	や145
doesn't 3	them.....20	して181	よう.....126
doing 1	themselves..... 4	諸..... 5	ようだ..... 2
don't..... 2	These30	しょう..... 1	ような.....71
F..... 8	these.....66	上21	よって.....84
feet..... 1	They11	しれない..... 8	より125
From 5	they.....44	数28	よる70
from186	This60	すべて.....46	よれば.....27
ft.....14	this80	する110	ら 1
had.....27	Those 2	そして.....23	られた..... 8
has.....109	those30	その185	れば..... 3
have.....131	To25	だ89	われわれ.....10
having11	to986	たち.....17	を.....1815
He..... 6	tons.....12	たら..... 3	合計17873
he.....16	very.....23	つつ.....13	
himself..... 1	vs..... 1	て..... 8	
His..... 1	You 2	で.....1037	

総レコード件数、英和編37,178件、和英編41,029件から上記のレコードを含む英和編18,883件、和英編22,674件を削除し、最終出力レコード件数は英和編18,295件、和英編18,355件となっています。

熟語表現キーワード

英 和 編

凡 例

- ここに揚げる語句は、本大辞典の文例検索のために作成したキーワードであります。
- キーワードは、一般の英和辞典に収められている熟語のほかに、英文和文のいずれもにおいて常套的な表現を構成する語句を選定しております。とくに和表現に重点を置いたものであることにご注目下さい。
- 冠詞、be 動詞、仮主語など、語順配列のソート対象としない語句は [] でくくっております。
- 語法上出典の語句を残した方が利用に便な場合は、その語句をソート対象としないよう [] でくくっております。
- 動詞には自動詞、他動詞の別がありますが、本キーワードでは繁になることを避け、対応訳の和表現で (), ~を使うなどして、その別が分かるよう工夫しております。
- 本大辞典では動詞をキーとした場合、文例にある現在、過去、現在完了、受動態の形で検索しておりますが、本キーワード集では可能な限り原型に変換しております。
- 英熟語にある前置詞は、本大辞典の場合重要なキーとなるため、in, at, on など全て検索の対象としております。

編 集 部

A

abbreviation for (の)略語

[be]able to 可能である,し得る,できる

[smoke spread is]accelerated by[winds]
(風によって煙が)加速度的に広がる

access to or from (～へまたは～からの)アクセス

accompanying flow diagram 添付のフロー図

[this is]accomplished by (で)実現できる

according to (に)従って,(に)よれば

account for 原因である,割合を占める

accusations have been made that (と)非難の声があがっている

[be]acquainted with (に)精通している

act as (として)働く,(としての)役割を果たす
act in similar fashion 同じ仕方で作動する,同様に働く

adapt to (に)適合する

add[～]to (～に～を)加える

add up to 総計～になる

adjacent to (に)隣接した

adjust the setting 設定値を調節する

advances are being made along (に)わたって進歩している

advance the state-of-the-art in

technologies 技術水準を高める

after each use 使用後その都度

after the fashion of (に)ならって,風に,流に

after the form of (の)書式どおりに

after the model of (を)模範として

ahead of (の)前に,(より)まさって

aim at (を)ねらう

aim specifically at (を)特に目ざす

all goes according to plan (すべてが)計画どおりにゆく

[be]all the more effective (だけ)いっそう効果的,なおさら効果的

[be]almost a carbon copy of ほとんど同じである,ほとんどそっくりそのままである

almost totally free of serious fires ほとんど全く大火に見舞われない

along with (に)加えて,(と)共に

alternative to (に)代わるもの,(への)代替案

amount to (に)達する

analogous to (と)類似した

[to be]answered 今後明らかにしなくてはならない

answer to (に対する)解答

apart from (とは)別の

[the]appearance of (の)出現と同時に

appended to (に)付加された

apply to (に)適用する

approach to (への)アプローチ

appropriate to (に)適当な

arise from (から)生ずる

arm with (で)武装する

[be]around for years (何年にもわたって広い)経験を持つ

as a branch of study 研究の一分野として

as a prerequisite for (のための)前提条件として

as a result, 結果として

as a result of (の)結果として

as compared to (と)比べると

as contrasted to (とは)対照的に

as for (に)関するかぎりでは

aside from とはいえ,(を)別にして,(の)ほかに

as is the case with (と)同様に

ask for (を)求める,(を)要する

as long as (する)限り

as might be expected 当然のことだが

as much as[50%] ほとんど

as opposed to (に)対立するものとして

as part of preparation for (の)準備の一部として

as quickly and safely as possible できるだけ短時間かつ安全に

as[educators]see it (教育者に)いわせれば

associated with (と)関連した

as soon as 次第,するや否や

as such それ自体,それとして,それなりに

as the basis for (に対する)基準として

as the name implies 名前が示すように

as to (に)関して

as well おまけに,その上,なお

as well as (は)もちろん

as with (の)ように

at a cost we can afford (可能な)コストで
at a distance (ある)距離をおいて
at a loss 当惑して
at an altitude of (という)高度で, 高度～で
at any rate とにかく
at a rapid pace (早い)速度で
at a significant cost penalty (大幅な)コスト増を承知の上で
at a step rate (段階的な)速度で
at a stone's throw from (ごく)近い所に
at a time 一度に, 同時に
at certain intervals (ある一定の)間隔で
at enmity with (と)仲たがいで, (と)反目して
at fault 故障して
at first glance 一見したところ
at grips with (と)取り組み合って
at hand 当面
at home in (が)上手, (に)精通して
at home with (が)上手, (に)精通して
at intervals ここかしこで, 時間間隔で
at large 概して, 全体として
at least 最少, 最低, 少なくとも
at least as great as 少なくとも～程度
at least for the present (少なくとも)当面は
at once 直ちに, 同時に
at present 現在
at rates of (の)速度で
at selected frequencies (指定された)振動数で
at specified time intervals (決められた)時間間隔で
attach to (に)取り付ける
attempt at (の)試み
at that time その時点で
at the advent of (の)出現で
at the appearance of (の)見て
at the back of (の)後に
at the bare idea of (を)考えただけで
at the bare mention of (といった)だけでも
at the base of (の)根底に, (の)ふもとに
at the conclusion of (の)終わりに当たり
at the dictation of (の)指図のままに
at the discretion of (の)意のままに
at the expiration of (の)満期とともに
at the extremity of (の)端に

at the first indication of (の)きざしがあり次第
at the hand of (の)手を通して, (の)働きで
at the hands of (の)手を通して, (の)働きで
at the hazard of (を)賭けて
at the head of (の)上座(上席)に, (の)首席に, (の)先頭に立って, (を)率いて
at the heels of (の)直後に追隨して
at the height of (の)頂上では, (の)まっ最中
at the instance of (の)求めで
at the mercy of (の)なすがままに
at the most せいぜい
at the other end of the spectrum (ある)範囲内で対照的に一方の側に
at the outset 当初は
at the point of (の)まぎわに
at the price of (を)犠牲にして
at the rear of (の)背後に
at the request of (の)要請により
at the sacrifice of (を)犠牲にして
at the same time 同時に
at the tail of (の)最後に
at the threshold of (の)始めに, (の)発端に
at the utmost せいぜい
attract[~]into engagement (～を)エンゲージする
at unity with (と)一致して, (と)和合して
at variance with (と)意見が違って, (に)反して, (と)不和で, (と)矛盾して
at war with (と)交戦中で
avoid the need to (する)必要がない
away from (から)離れて

B

back to back 背中合せに
[be]based on 基準は～である, (に)基準をおいた
[be]based on the concept that (という)考え方に基づいた
[be]based upon 基準は～である, (に)基準をおいた
[be]basic to (の)基本をなす
bear on (を)圧迫する, (に)影響力がある
because of (の)理由で
become available 現われる, 利用できるように

なる
[convergence] becomes even more striking (なお一層)顕著化する傾向にある
beginning with[～], moving through[～], and ending with まず～つぎに～最後に～
begin to (し)始める
begin to grow 大きくなり始める
begin with[～]go through (から)始め～をし終える
below the standard 標準以下で(不合格で)
benefit most from (から最も)利益を受ける
[the]best available way to (のできる)最上の方法
best suited to (に最も)適した
better adapted to (により)適する
beyond the compass of (の)範囲外に
beyond the control of (の)及ばない,(の)管理を越えて,(の)手に余る
beyond the sweep of (の)及ばないところ
[a]bit more complex やや複雑な
break down into (に)分類する
break with (を)断つ,(を)破る
bridge the gap between (の)ギャップを埋める
bring about もたらす
bring dramatic improvements in (目ざましい)発展を遂げる
bring[～]into the real world (～を)現実の世界に登場させる
[a]broad range of 広範囲の
brought added sophistication to (一段と)洗練された
brought a dramatic new dimension to (に)新紀元が到来した
brought a[belated]revision of (の)改正をもたらした
brought certain advantages to (にある種の)利点をもたらせた
build into (に)組込む
build onto (面に)組込む
[be]built mainly of (主として～で)作られた
[be]built up of (で)組立てられる
but a few of ほんの数例の
by a large margin 大幅に,かなり
by analogy with (より)類推して
by and large 全般的にみて

by comparison 比較すると
by contrast with (との)対照によって
by courtesy of (の)好意により
by dint of (の)力で
by far はるかに
by favor of (の)好意で
by force of (の)力で,(に)よって
by fractions of percentages わずかながら
by lack of (が)欠乏しているために,(が)ないために
by means of (に)よって,(に)より
by reason of (の)理由で
by right of (の)権利で
by the action of (の)作用で
by the advice of (の)忠告で
by the aid of (の)助けにより,(を)用いて
by the authority of (に)許可を得て,(の)權威で
by the courtesy of (の)好意により
by the force of (の)力で,(に)よって
by the hands of (の)力で,(の)手をへて
by the medium of (の)媒介で
by the name of (という)名で
by the side of (の)そばに,(の)近くに,(に)比して
by the use of (を)用いて
by virtue of (の)力で,(に)よって,(の)理由に基づき
by way of 経由して,(の)つもりで,(を)通って,として

C

call for (を)要求する
call for[～]to (～が～することを)要求する
call upon (に)求める,(に)要求する
can be at fault 故障する危険性がある
[be]capable of できる
capitalize on (に)資本を投下する,(に)費用を出す
carry on 運営する,続ける
carry out 行う,実行する
carry over to (に)繰越す
[be]categorized by (で)分類する,(ごとに)分ける
[be]caught in (に)はさまる

certainly たしかに
change inversely with (と)逆に変化する
check against (に対して)チェックする
check for (を)チェックする
check out on (に基いて)チェックする
checks are made of (について)点検する
choose from (から)選択する
[be]classified into (に)分類される
close in value to 値が~に近い
close to (に)近接して
coat with (で)塗装する
combat this trend (この)傾向に対処する
combine in (に)一体化する
combine with (~と)相まって~する, (~を~に)結合する
come about 起こる, 生じる
come along with (を)伴ってくる
come[very]close to 近接する
come from (から)生まれる, (から)来る
[would most definitely]come into conflict with (との)矛盾は火を見るより明らかだ
come into[its]own (正当の)評価を受ける
come out of (から)出てくる
come to grips with (と)取り組む
come under the influence of (の)影響を受ける
come up with (を)伴う
commit[oneself]to (に)ゆだねる
common to (に)共通
communication with 相互通信, (との)通信
compared to (に)比較して
compared with (に)比較して
compare[~]to (に)比較して
compatible with (と)互換性がある, (に)耐える, (と)両立し得る
compensate for (を)補償する
competitive with (との)競合力がある, (と)対抗する
comprised of (から)成る
concentrate on (に)集中する
[be]concentrating[their main efforts]on developing (主として~を)開発すべく努力している
concern about (についての)関心, (の)問題
concern for[human safety] (良いことへの)関心

concern over[high-rise fires] (良くないことへの)関心
concern over (の)心配, (の)問題
conclusions are reached 結論は~である
concurrently with (と)同時に
confrontation will inevitably come 対決問題が発生するだろう
confuse[~]with (~を~と)混同する
connect in parallel 並列に接続する
connect with (を)結合する
[a]considerable amount of かなりの量の, 相当な量の
considerable time is required for[~]to (~が~するのは)まだまだである
consistent with (に)合わせた, (と)一貫した
consist of (から)成る
constraints that must be observed are : (遵守しなければならない)制限条件は次のとおりである
contend with (と)競争している
content to (に)甘んじて, (に)満足して
contrast to (と)対照する
contribute (に)貢献する, (に)役立つ
contribute little to (ほとんど)役に立たない
contribute toward competitive strength 競争力を助長する
control over (の)制御
conversion to (への)変換
convert into (に)変換する
convert to (に)変換する
cope with (に)対抗する, (に)対処する
correlate well with (とよく)関連している
correlate[~]with (~を~と)関連させる
correspond to (に)該当する, (に)対応する
costs will go down and performance will improve コスト低減と性能向上は実現される
couldn't provide enough muscle 十分な力が得られない
[a]couple of いくらかの, 一対の, 二, 三の, 二つの
[can be]credited with (~させるという点で)価値があるものと思われる
credited with (と)信じられる
critical to (には)決定的
currently available 今日到達している
currently in use 現在使用中の, (現在)使用さ

れて

[be]currently under development that (目下)開発中の

D

deal with (を)取り扱う

decide on (を)決定する

define[~]as (～を～と)定義づける

demand for (に対する)需要,(の)要望

depend completely on 全面的に頼る

dependent upon (に)頼って

depending on (に)より

depending on the source その筋によれば

depend more on (に)頼るところ大

depend on (によって)決まる,(に)よる

depend primarily on 主として～による

depend upon (によって)異なる,(に)よる

[be]derivable from (から)誘導できる

derive from (から)得る,(から)誘導する

designated[~]by number 数字で指定した

designed specifically to (するようとくに)設計された

despite (にも)かかわらず

despite of (にも)かかわらず

despite some questions of (に)多少の問題は残すにしても

despite the many attempts to (と多々)試みているが

deteriorate with age 経時変化する,時間がたつと劣化する

determine if (かどうか)確認する

[these]developments will go a long way

toward 開発活動はすべて～に沿って推進される

devote[his]attention to 注意力をもっぱら～に向ける

differences between programs (プログラム間の)相違

differ in the details of (の)細部は～によって異なる

[the]difficulty arises in determining just

where 問題はその位置をはっきり規定できない点にある

[be]directly related to (と)直接関連する

dispose of (を)処分する

distinguish between[~]and (～を～から)区別する,(～と～を)区別する

distinguish[~]from (～を～から)区別する

divide[~]by (で～を)割る

[be]divided into (に)分けられる

do a good job (よく)働く

do not see the lines as nearly as clear

(はっきりした)線を描いてない

draw upon (を)参考にする,(に)頼る

due to (に)よって

during initial phases of (の)当初

[be]dwarfed by (により)影をひそめてしまう

E

[be]eager to しきりに～したがる

[is]easily accomplished via (を利用して)可能である

economically feasible only when (する場合にのみ)経済的に見合う

[the]effect on the engineering community could be significant 技術界に大きな変化があらわれそうだ

either or both 一方または両方

emerge as (として)現われる

enable[~]to (により～が～)できる,(～を～)できるようにする

end up with 最後に～する

engaged in (に)たずさわる

[an]enormous amount of 非常に大量の

[be]entered into (に)入れられる

equal or exceed 同等もしくは以上

equal to (と)同じ,(と)同等

[be]equipped with (を)装備している

[be]equivalent in[~]to (～において～に)等しい

essential to (に)欠かせない,(に)本質的な

everyone agrees that (を)誰でも認める

every two weeks 二週間ごと

evolve into 進歩して～になる,(に)発展する

evolve toward 進展して～方向へ行く,(に向かつて)進歩する

except for (を)除いて

except that (ということを)除いて

existing preventative measures 防止対策が開発されている